

特集

OCT angiography アップデート

序 論

飯田知弘*

本号の特集は今話題の OCT angiography (OCTA) の最新情報です。本誌でも 2 年前の 2017 年 3 月号で「今, OCT angiography でわかること・わからないこと」という特集が組まれました。その後の OCTA の技術と臨床における有用性の進歩はめざましく、今回、「OCT angiography アップデート」を企画しました。

この 2 年間で、OCTA を取り巻く環境で大きく変わったことは、光干渉断層血管撮影として保険収載されたこともあり、限られた施設での臨床研究の枠を超えて一般診療での診断技術として普及しはじめたことです。

OCTA は、OCT の原理を用いて動きのある構造物を画像化して血流情報を描出する技術で、造影剤を用いずに非侵襲的に血管構造を観察することのできる画期的な検査法です。もうひとつ重要な利点は網膜に平行な面 (*en face* 画像) で層別に血管を観察できることです。また、蛍光眼底造影とは異なり漏出は捉えられないものの、これが血管構造を鮮明に描出できるメリットにもなっています。これらの特長から臨床研究における OCTA の有用性は多数報告されてきましたが、OCTA が登場した当初は撮影画角が狭いことやアーチファクトによる読影への影響が臨床上の問題点として挙げられていました。

OCTA の最大の利点である造影剤を使用しな

い非侵襲性・安全性は、実臨床で広く普及すべき大きな魅力を有しています。多数の臨床研究の成果に加え、前向き研究による優れた病変検出のエビデンスも追加されて、2018 年 4 月に「光干渉断層血管撮影」が保険収載されました¹⁾²⁾。これにより臨床研究から眼科一般診療にも普及する弾みがつき、それと同時に機器メーカーの開発競争によりハードウェアとソフトウェアが進歩して、それがまた日常診療での有用性を高めて普及を促進するという良いサイクルが生じています。わが国の眼科機器メーカーが OCT 開発で世界を牽引してきた地盤があったことも大きいと思います。

では、OCTA は蛍光眼底造影に取って代わる検査になったのでしょうか？ まだ蛍光眼底造影に置き換わるころまではっていないものの、少なくとも筆者らの施設ではその実施回数は格段に減っています。その背景には、OCTA が広画角化により網膜血管疾患での周辺部病変の検出が可能になったこと、アーチファクト除去により脈絡膜新生血管などの正確な診断が可能になったこと、ソフトウェアの進歩で画質が改善したこと、などが挙げられます。脈絡膜新生血管の診断においては OCTA なしでは怖くて診療ができないと感じています。

本特集では、進歩し続ける OCTA の最新情報を各分野で活躍されている先生方に執筆していただきました。それぞれの領域での文献レビューのほか、研究や診療で OCTA 情報を最大限引き出

*Tomohiro IIDA 東京女子医科大学眼科学教室

す工夫，アーチファクトの理解や OCTA cross-sectional 画像との対比など読影するうえでの注意点，今後の期待されることなど，今必要な OCTA の情報が余すところなく盛り込まれています。本特集で知識の整理をすることで，OCTA を最大限活かして，より診療に役立てていただけるものと思います。

文献

- 1) 野崎実穂，園田祥三，丸子一郎ほか：網脈絡膜疾患における光干渉断層血管撮影と蛍光眼底造影との有用性の比較．臨眼 71：651-9, 2017
- 2) 飯田知弘：平成 30 年度診療報酬改定の総括 光干渉断層血管撮影の保険収載．日本の眼科 90：184, 2019